

鶴飼石齋付訓『四書大全』異版間に見られる訓読の異同

永 松 寛 明

はじめに

近世の訓読語の実態は、近年次第に明らかにされつつあるが、未だ多くの課題が残されている。¹⁾中でも近世の版本の特性と言語の關係といった視点から実態の究明が行われることは少なかつたように思われる。一例として和刻本を漢文訓読語史研究の資料として取り上げる際に、異版間での言語の異同に対する検討があると考えられる。本論では同一書名、同一点者の資料の異版間において訓読の異同が認められることを取り上げ、その異同の様相について言語的側面から整理を行い、その異同の持つ意味について考察する。

以下には、近世初期の儒者、鶴飼石齋付訓の『四書大全』を取り上げて論ずることとする。²⁾

一、石齋点『四書大全』について

鶴飼石齋は、藤原惺窩の高弟那波活所の弟子である。正保三年（一六四六）三十二歳で尼崎藩主青山侯に仕えて藩儒となり、万治元年（一六五八）致仕して京都にあつて講説した。寛文四年（一六六四）七月二十一日に没しており、四書五経以外の漢籍の翻刻を初めて行つたといわれる。³⁾

『四書大全』は、明の成祖の永楽十三年（一四一五）翰林学士胡広らが勅により奉つたものであり、四書の正文と朱注に関する宋元儒の説を集めている。中でも元の倪士毅の『四書輯釈』によるところが多く、そうした宋元儒の学説を集成した『四書大全』は科擧の標準解釈とみなされたために、十五世紀初頭から十六世紀初頭に至る期間には、中国ではもっぱら大全の吸収遵奉が志されていたようである。⁴⁾『四書大全』は、中国では明代の初めから四書の注釈書の

主要な位置を占めていたが、和刻本として刊行されたのは、「先哲叢談」の記述によると寛永十二年（一六三五）である。「先哲叢談」には、「四書大全」に五種あり、最初に刊行されたのが寛永十二年の僧自乾の付訓になるものであり、その後、万治寛文年間に複数種類が刊行されていることが記されている。長澤規矩也「和刻本漢籍分類目録」（汲古書院 昭和五十一年）にも幾種かの「四書大全」が挙げられており、それらの記述を合わせると、江戸時代初期において「四書大全」に石齋点以外にも複数の点が存在していたことが知られる。

二、系統間の訓読の異同について

石齋点「四書大全」の諸版については大江文城「本邦四書訓點并に注解の史的的研究」（關書院 昭和十年）や、宇野田尚哉「板行儒書の普及と近世儒学」（「江戸の思想」五 べりかん社 平成八年）に触れるところがあるが、稿者の調査範囲では、刊記や頭注の形式により諸版を三種類に分類出来ると考える。三種類とは、第一には慶安四年刊の刊記があるものと、慶安四年刊、万治二年修の刊記があるものであり、第二には明暦二年刊の刊記があるもの、第三には刊記に刊行年の記載が無いものの三種類である。この三種類に対応して、頭注の形式も三類に分かれる。

この三種類の版の訓読を調査すると、前者二つの刊行年が明確な

ものと、後者の刊行年未詳本との間で訓読に異同が見られる。この言語上の異同について、具体的に「四書大全」の中で如何なる様相が存するかを示すため、「論語集註大全」の前半十篇を取り上げる。調査対象に「論語」を選定した理由は、先行研究によって訓読の史的位置づけが進んでいるためで、そうした資料を取り上げることによって、石齋点の近世における訓読の性格が把握し易くなると考えたことによる。以下、慶安四年刊本、万治二年修本と明暦二年刊本の訓読を甲類とし、刊行年未詳本の訓読を乙類として取り扱う。

次に甲乙両系統間の訓読の異同数を一覧する。

表一 付訓の位置より見た訓読の異同数(単字、熟字を対象として)

付訓の位置	用例数
I 異同例のうち、甲乙両系統何れかに左傍訓を有する例	63例
II 右傍訓の異同例	
A 甲乙両系統に見られる例	88例
B 甲系統にのみ訓が見られる例	164例
C 乙系統にのみ訓が見られる例	35例
D 甲系統に訓があり、乙系統は部分付訓の例	65例
E 乙系統に訓があり、甲系統は部分付訓の例	8例

表一は、甲乙両系統の同一箇所において付訓に異同が見られる場合に、その付訓の位置に従って分類を行ったものである。大きく左傍訓の有無や左傍訓の違いによる異同と、右傍訓における異同の二つに分類した。

用例は、甲類の代表例として、比較的版面が判読し易い浅野家文庫本を取り上げ、乙類の代表例として岡山大学附属図書館本を取り上げた。

以下に訓読の異なる具体的用例を記す。

先ず「I」異同例のうち、甲乙両系統何れかに左傍訓を有する例」の具体例を示す。

用例一

① 惡不仁、一者其爲レ仁、矣 不レ使、下不仁者、一加中乎其身
 ② 惡不仁、一者其爲レ仁、矣 不レ使、下不仁者、一加中乎其身
 浅野 (4・6)

岡山2 (4・6)

用例中「爲」字は、甲類の訓読では、「スルナリ」という右傍訓と「コト」という左傍訓とが存する。それに対して、乙類の訓読では、「爲」字には右傍訓「スルニ」しか見られない。右の如き例を、甲乙両系統何れかに左傍訓を有する例の項に含める。

次に、右傍訓において異同が見られる例の内、先ず、「A 甲乙両系統に訓が見られる例」を取り上げる。

下段に示した表一は、当該項目に含まれる例を分類し、用例数を一覧するために、字訓、字訓＋読添語、読添語の三類の異同に分かり、その下位に品詞等の項目を設けたものである。各項目の下には、用例数と当該分類項目内の両系統の代表的異同例を掲げた。

表一 Aの用例数一覧

字訓	異同の種類		用例数	甲類代表的付訓例		乙類代表的付訓例															
	動詞	動詞(音便)		動詞(活用の種類)	動詞(活用形)	副詞	名詞	連体詞・代名詞	その他	助詞＋動詞	助詞＋形式語	動詞＋助動詞	形式語	形式語＋ク語尾	形式語＋助詞	助詞	助詞(ガノ)	助詞＋形式語	助詞＋助詞	(用例数合計)	
	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	88
	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	10
	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	5
	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	15
	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	11
	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	7
	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

この表から甲類と乙類との間で特徴的な異同であると判断される例について、以下に検討を行う。

用例二 動詞の訓読の違い

② 惡^レ不^レ仁^一 一者其爲^レ仁^一 矣 不^レ使^テ下^二不^レ仁^一者^一 一加^ヘ中^中乎^乎其^其身^身上^上

浅野(4・6)

② 惡^レ不^レ仁^一 一者其爲^レ仁^一 矣 不^レ使^テ下^二不^レ仁^一者^一 一加^ヘ中^中乎^乎其^其身^身上^上

岡山2(4・6)

Aの異同中、動詞の訓読の違いである。甲類では、「スル」と付訓が施されており、乙類は和語で「ニクム」と訓読している。動詞の訓読の違いについては、現在のところ、その違いが何に基づくものであるかの検討が不十分であり、異同の指摘にとどめておく。

用例三 副詞の訓読の違い

③ 不^レ義^一 而^レ富^レ且^レ貴^レ於^レ我^一 如^二浮^レ雲^一

浅野(7・15)

③ 不^レ義^一 而^レ富^レ且^レ貴^レ於^レ我^一 如^二浮^レ雲^一

岡山2(7・15)

右は、「且」字を「マタ」と訓読するか「カツ」と訓読するかという違いである。「且」字を「カツ」と訓読することは、室町時代以降に見られる新しい訓読であるとされる。今後、更なる実証が必要となるが、その説に従うならば、「マタ」訓が古く、「カツ」訓が新しいということになる。甲乙の石齋点内部において「且」字を甲類では「マタ」、乙類では「カツ」と訓読している。『論語』の「学而篇」から「郷党篇」までの十篇において、付訓例としては四例存する。何れも甲類に「マタ」訓、乙類に「カツ」訓が見られる。

用例四 読添えられた助詞の違い

④ 子貢曰我不^レ欲^二三^レ人^一之^レ加^二諸^レ我^一也 吾亦欲^レ無^レ加^二諸^レ人^一

浅野(5・12)

④ 子貢曰我不^レ欲^二三^レ人^一之^レ加^二諸^レ我^一也 吾亦欲^レ無^レ加^二諸^レ人^一

岡山2(5・12)

主格を示す助詞の訓読の違いについて、甲類が格助詞の「ガ」を用いている箇所乙類では、格助詞の「ノ」を用いている例である。「学而篇」から「郷党篇」まで、当該用例と類似のものは十一例存する。十一例全て、甲類が「ガ」と付訓している箇所を乙類では「ノ」と付訓しており、例外がない。助詞の訓読の異同は他にも見受けられるが、二つの対立する事象が甲乙両系統に対応して現れるのは格助詞「ガ」と「ノ」の対立である。主格の「ガ」は甲類の訓読では「学而篇」から「郷党篇」まで三十例あり、同様の箇所を乙類では無付訓が十三例、「ノ」の付訓が十一例、「ガ」の付訓は六例存する。

当該箇所の主語と付訓の関係について調べると、甲類では主語が弟子や話し手自身である場合に「ガ」を使用し、主語が先生である場合に「ノ」を使用するという使い分けが見られるのに対して、乙類では、その使い分け自体が見られず、「ノ」を主に用いている。次は、助字の訓読法に関して、ク語法を用いるか否かという例である。

用例五 助字「欲」の訓読法の違い

- ⑤ 犁牛之子驂 且角 雖 欲 勿 用 山川其舍 諸 浅野(6・6)
- ⑥ 犁牛之子驂 且角 雖 欲 勿 用 山川其舍 諸 岡山2(6・6)

「欲」字の訓読法は甲類では、「マク欲ス」であるが、乙類では「ソコトヲ欲ス」とある。この対立も「学而篇」から「郷党篇」において、傾向が存する。助字「欲」字の訓読法に関わらず語法の用例を全て取り上げると、「A 甲乙両系統に訓が見られる例」においては七例、「B 甲系統にのみ訓が見られる例」においては十三例見いだせる。何れも甲類にク語法が用いられ、乙類では用いられない。

「マク欲ス」と「ソコトヲ欲ス(ソト欲ス)」の関係については、時代は降るが、日尾荆山(一七八九—一八五九)の「訓点復古」をはじめとする漢語文典に説かれる。「訓点復古」は、国語の語法を無視した訓読(佐藤一斎の訓読を指していたといわれる)を攻撃し、江戸時代初期の藤原惺窩や、林羅山の訓読へ戻るべきであると説いている。その中で、荆山は「マク欲ス」は古い訓読法であり、平安鎌倉時代では、博士家の訓読法であったとする。(9)

次に「B 右傍訓の異同例のうち、甲系統にのみ訓が見られる例」に関して述べる。

表三は、異同の種類として甲類にのみ見られる付訓を字訓と読添語とに分け、以下それらが如何なる品詞等に分類されるかを示し、各々の用例数と当該分類における甲類の代表的付訓例を掲げた。

表三 Bの用例数一覧

異同の種類	用例数	甲類代表的付訓例	読添語	
			字訓(十読添語)	(用例数合計)
形容詞活用語尾	2	樂 _{タカシ}	〔漢語〕十形式語	8
形容詞十助詞十助動詞	1	直 _{チカシ}	ク語尾	13
動詞	21	日 _ヒ	助動詞	24
動詞十形式語	10	巧 _{ウツクシ}	〔漢語〕十助動詞	14
副詞の最終音節	22	且 _{カニ}	形容詞の活用語尾十助動詞	2
名詞	5	美 _{ウツクシ}	助詞	3
名詞十助詞	1	斯 _{コト}	〔漢語〕十助詞	9
連体詞の一部	2	以 _{ヨリ}	動詞の活用語尾十助詞	17
連体詞の二部	2	其 _{ソノ}	漢語(人名)十助詞方	13
連語の一部	4	不 _{ナシ}	〔漢語〕十之	23
		君 _{キミ}		184

先にも触れたが、ク語法の有無による異同が十三例存することや、助詞の異同について人名漢字に主格助詞「ガ」が付されるか否かという問題がある。

次に「C」右傍訓の異同例のうち、乙系統にのみ訓が見られる例」に関して触れる。

用例六 助字「之」の訓読法の違い

⑥子曰非_レ其鬼_一而祭_レ之_一 諂_レ也 見_レ義不_レ爲無_レ勇也

浅野(2・24)

⑥子曰非_レ其鬼_一而祭_レ之_一 諂_レ也 見_レ義不_レ爲無_レ勇也

岡山2(2・24)

右は、現象的には「之」字に対して甲類に付訓がなく、乙類に助詞「ヲ」の付訓が存する例で、助字「之」を訓読するか否かという例である。「学而篇」から「郷党篇」において「之」字を不読にするか訓読するかという対立は十六例存し、常に甲類において付訓がなく、「之」字が不読とされ、乙類では、返点や目的格を示す助詞が付訓されている。「四書」の「之」字の訓読法については、不読の用法が古く、それを江戸時代になって訓み落としないよう訓読するようになることが、石川洋子により明らかにされている。¹¹⁾

以下にCに属する用例の一覧を行う。

表四より「C」右傍訓の異同例のうち、乙系統にのみ訓が見ら

れる例」の総用例数三十五例中、助字「之」の訓読の異同例は十六例と半数近くを占めていることが分かる。

表四 Cの用例数覧

異同の種類	字訓	
	名詞	助字の訓読法
読添語	(返り点)「之」	「之」+助詞「ヲ」
	「漢語」+助詞「一」	「漢語」+助詞「一」
(用例数合計)	2	35
	乙類代表的付訓例	其 _レ 之 _一 位 _ニ 之 _一 益 _ヲ 子 _ヲ 諂 _ヲ

以上のAからCまでとDEとを加えて、通覧すると、同じく石京点でありながら、甲類の方が乙類より訓点が密に施されている傾向が見て取れる。又、訓読語については、「且」字の「マタ」訓や主格助詞「ガ」と「ノ」の使い分け、ク語法や不読の「之」字などが存することより、甲類の方が乙類より伝統的な訓読を伝えているものと判断される。

三、甲乙兩系統の先後関係

甲乙兩系統の訓読の異同について助字や読添語を中心に検討した

結果、漢文訓読語史の上からは、甲類が時代的に古い伝統的な訓読を示し、乙類が新しい訓読を示すことが判明した。しかし、ここで両者が実際に何時加点了されたのか、或いは刊行されたのが問題となる。それは、石齋個人の訓読史の中で、後に復古的訓読を採った可能性等も否定出来ないものであつて、この点の解明が必要と判断されるからである。そこで先ず、刊行の先後の問題を解決するため、書誌的な事柄である頭注と「石齋」の呼称の変化の二点に注目した。

第一に、両系統の頭注の形態について述べると、甲類の慶安四年刊本（万治二年修本も含む）では頭注は無く、匡郭も正文と注文とを囲む枠しか存しない。もう一つの甲類である明暦二年刊本では頭注が見られるが、頭注に付される訓点は全ての頭注にわたつていわけではない。又、明暦二年刊本の頭注冒頭にある引用を示す符号は「▲」が用いられている。一方、乙類である刊行年未詳本の刊記に頭注は藤原惺窩輯であると記されており、頭注の分量も甲類の明暦二年刊本より多い。又、訓点も頭注全てに付されており、頭注に含まれる注の内容も甲類の明暦二年刊本と比較すると異なりがある。内容ばかりではなく、頭注冒頭の引用を示す符号は「○」が用いられており、この点においても明暦二年刊本とは異なる。

以上の書物の形態についてまとめると、甲類の頭注は量が少なく、それに比して乙類の頭注は多い。又、訓点に関しても甲類では頭注が存する明暦二年刊本に付訓はほとんど見られず、乙類の頭注

には付訓が全体にわたり施されている。頭注が僅少なことから多量なものへと移行し、それに伴い、頭注に付される訓点の量も増加すると考えられ構成上の発展の形式を想定しやす。つまり、甲類が先に刊行され、それを承けて乙類が刊行されたとの仮説が立てられる。

第二に「石齋」の呼称の変化に関して述べる前に、石齋点と称される資料は、何時如何なるものが刊行されていたのかを確認しておきたい。

表五 石齋点資料刊行略年表

石齋点資料	年号	石齋事跡
【周易大全】	正保三年(二六四六)	尾崎藩藩儒となる
【官板四書大全】	慶安元年(二六四八)	
【学的】	慶安四年(二六五〇)	
【杜少陵先生詩分類集註】	承応二年(二六五三)	
【事物紀原】	明暦二年(二六五六)	致仕、京都に講説
【官板四書大全】修本	万治元年(二六五八)	
【韓柳全集】	万治二年(二六五九)	
【唐韓昌黎先生文集】	万治三年(二六六〇)	
【白虎通德論】	寛文元年(二六六一)	
【歴史大方綱鑑補】	寛文三年(二六六三)	
【古文真宝諺解大成】	寛文四年(二六六四)	七月、干豆没
【淮南鴻烈解】	寛文四年(二六六四)	
【唐柳河東集】	寛文五年(二六六五)	(五十歳)
【武備志】		
【退溪先生自省録】		
【周易大全】は慶安年間刊行。		
【韓柳全集】は、万治二年から寛文四年まで刊行された。		

表五は主な石齋点資料を刊行年順に配列したものである。この表より、「官板四書大全」という甲類の「四書大全」は、石齋点資料の中では比較的早い時期に刊行されていることや、石齋点資料が万治寛文年間に多く刊行されていることがうかがえる。

次に甲類の慶安四年刊本の刊記と乙類の刊行年未詳本の刊記とを比較すると、

○慶安四年歲次辛卯夏四月日／洛陽後學石菴鶴信之訓點并校讎(甲類)
 ○鼈頭評註 妙寿院惺窩藤敏夫先生輯 刪補訓點 石齋鶴信之(乙類)
 傍線箇所(稿者による)の名称に差異が存する。甲類の慶安四年刊本の刊記では「石菴」と記し、乙類の刊行年未詳本の刊記では「石齋」と記す。この二つの呼称について、「倭板書籍考」の中に記述がある。「倭板書籍考」では、「四書大全」以外の石齋点資料についても紹介しており、石齋点「四書存疑」についての説明中に以下の記事がある。

「倭訓鶴飼石菴信之也 菴後ニ石齋ニ改(ム)」
 (卷二・八丁ウ六行目、()と傍線とは稿者による。)

この記事に従うと、現在残されている乙類「鼈頭評註四書大全」は、刊記に「石齋」とあることから、「四書存疑」(承応三年(一六五四)刊)の後に刊行された可能性があると考えられる。

そこで、「倭板書籍考」の記述の正否を確認するため、現在残されている石齋点資料について、刊記中でどのように呼んでいるかを

調べたものが次の表である。¹³⁾

表六 石齋点資料の刊記に見られる鶴飼信之の呼称一覧

石齋点刊行資料	刊行年	刊記に存する石齋の呼称
「四書大全」	慶安四年(一六五二)刊	「石菴」
「杜少陵先生詩分類集註」	明暦二年(一六五六)刊	「石菴」
「事物紀原」	明暦二年(一六五九)刊	「石菴」
「四書大全」	万治二年(一六六九)修	「石菴」
「白虎通徳論」	寛文二年(一六六二)刊	「石齋*」
「歴史大方綱鑑補」	寛文三年(一六六三)刊	「石齋」
「淮南鴻烈解」	寛文四年(一六六四)刊	「石齋」
「唐柳河東集」	寛文四年(一六六四)刊	「石齋*」*は異体字

表六によると、寛文年間に入り、刊記中の石齋の呼称が「石菴」から「石齋」へと変わっていることが分かる。従って「倭板書籍考」の記事は、調査範囲では正しいと判断される。その上で、乙類の刊行年未詳「鼈頭評註四書大全」を位置づけると、万治年間以前に刊行された可能性は低いと認められる。

以上のことから、両系統の先後については、甲類が先で、乙類が後に刊行されたものと考ええる。又、実際に何時加点されたのかについては、加点年次というものをどのようにとらえるかによって問題が残る。しかし、最終的な加点(訓読確定)の時期を版下作成時であるのとらえる立場もあると思われ、その立場によるならば、「石

齋」の名称の変化に対応して、その内部の訓読語も甲類が先で、乙類が後のものであると位置づけることが出来ると考える。

次に、何故、異同が生じたかという点については、石齋個人の訓読が時間の推移とともに変化していったものか、石齋以外の手が入ったものか、更にその他の理由によるものかの実証は現在のところ困難である。理由について明らかにすることは出来ないが、訓読語では、「且」字の訓やく語法、不読の「之」字等に変化が見られ、その変化の方向性は江戸時代の訓読語の変化にも合致するものである。そうした変化が一個人の名を冠して近世初期の間に刊行された二種類の版の間に見られることは、様々な問題を提示するものと思われる。

おわりに

本論において明らかにしたのは以下の二点である。

一、江戸時代初期において¹⁵⁾刊行された石齋点「論語」の訓読には複数のものが存する。

一、訓読の異同は訓読語史の上から見ると特に助字や読添語を中心に、先に刊行されたものに古い伝統的な訓読語、後に刊行されたものに新しい訓読語が現れるという傾向が存する。

又、近年、石齋点「四書大全」の一本である「鼈頭評註四書大全」の刊記に「鼈頭評註 妙寿院惺窩藤斂夫先生輯」の記述があるこ

とと、石齋が惺窩の孫弟子であることなどから藤原惺窩の訓読とどのように関わるのか注目されている。¹⁶⁾ 本論で述べた如く、「鼈頭評註 妙寿院惺窩藤斂夫先生輯」の記述がある乙類の訓読が、先行する甲類とは部分的に異なることを考えると、藤原惺窩点の影響の有無については異版を区別した検討が必要となると思われる。

先の二点は更に以下の事柄を示唆すると思われる。改訂によって複数の点が生じている例として道春点や後藤点等が指摘されているが、¹⁷⁾石齋点にも類例が存することからも、版行された点本について改訂が行われたことは他にも見出される可能性がある。これは、点者の言語を一回的、硬直的なものと考えerのではなく、出版活動や言語活動の所産として結果的に変化がありうるという見方を必要とするものである。¹⁸⁾ つまり、和刻本の言語を論じる場合、付訓者が何歳のころの、どの資料の訓読であるかといった事柄や、改訂の有無、更には改訂が何者によってなされたかといった点を明らかにすることで、より詳細な点者個人の言語の記述へと進むことが出来る¹⁹⁾と考えるが、これらは今後の課題としたい。

注

(1) 村上雅孝「近世初期漢字文化の世界」(明治書院 平成十年) 序章第二節が参考となる。

(2) 調査対象資料の諸本について述べる。略称は本論で取り上げる際に用いた名称である。略称の番号は整理の都合上、付したものである。

〔浅野〕	広島市立中央図書館 浅野家文庫蔵	〔官板四書大全〕	〔慶安四年歲次辛卯夏四月日／洛陽後學石菴鶴信之訓點并校釋〕
〔岡山1〕	岡山大学附屬図書館 池田家文庫蔵	〔官板四書大全〕	〔萬治三己亥秋津辰ノ寺町通圓福寺前町ノ秋田屋平左衛門板本〕 〔慶安四年歲次辛卯夏四月日／洛陽後學石菴鶴信之訓點并校釋〕
〔内閣2〕	内閣文庫蔵	〔官板四書大全〕	刊記のある孟子集註卷之十三・十四は不存
〔内閣3〕	内閣文庫蔵	〔四書大全〕	〔岡山1〕に同じ
〔九州3〕	九州大学附屬図書館	〔四書大全〕	〔龍頭評註〕 妙壽院惺窩藤敏夫先生輯 刪補訓點 石菴鶴信之
〔大阪〕	大阪大学附屬図書館 櫻井文庫蔵	〔龍頭評註四書大全〕	〔明曆二年季春下刊之〕
〔内閣1〕	内閣文庫蔵	〔龍頭評註四書大全〕	〔龍頭評註〕 妙壽院惺窩藤敏夫先生輯 刪補訓點 石菴鶴信之
〔岡山2〕	岡山大学附屬図書館 池田家文庫蔵	〔龍頭評註四書大全〕	孟子集註卷之十三・十四は損傷著しく未見
〔山口〕	山口大学附屬図書館	〔四書大全〕	〔内閣1〕に同じ
〔九州1〕	九州大学附屬図書館蔵	〔四書大全〕	〔内閣1〕に同じ
〔九州2〕	九州大学附屬図書館蔵	〔龍頭評註四書大全〕	〔内閣1〕に同じ

項目は略称、所蔵場所、題簽題、刊記の順に記した。

以上の資料の他、『龍頭評註四書大全』は大分大学附屬図書館本、日田淡窓資料館本を参考にし、『龍頭新增四書大全』は岡山大学附屬図書館本、内閣文庫本、山口大学附屬図書館本等も参考にした。

(3) 東條琴臺『先哲叢談續編』(巻一・二九丁)

(4) 佐野公治『東洋字叢書 四書學史の研究』(創文社 昭和六十三年)

(5) 注(3) 資料(巻一・三三丁)

(6) 諸版の書誌的分類は、題簽、頭注、柱刻、構成、刊記の分類を元に行つた。以下に分類結果を表にした。

石菴点「四書大全」書誌的形態から見た分類表

所蔵場所	系	系統	題簽	頭注	柱刻	構成	刊記
〔浅野〕	系			○	+	△	慶
〔岡山1〕		慶安四年・万治二年刊校本	官	○	+	△	萬
〔内閣2〕		系統	官	○	+	△	萬
〔内閣3〕		明曆二年刊本系統	官	○	+	△	萬
〔九州3〕			官	○	+	△	萬
〔大阪〕			官	○	+	△	萬
〔内閣1〕			官	○	+	△	萬
〔岡山2〕			官	○	+	△	萬
〔山口〕			官	○	+	△	萬
〔九州1〕			官	○	+	△	萬
〔九州2〕		立閑点との取り合わせ本	官	○	+	△	萬

〔表中の記号〕 「題簽」欄にある「官」は題簽に「官板四書大全」とあるもの、「龍」は題簽に「龍頭評註四書大全」とあるものを示す。「頭注」欄の「○」は頭注が無いもの、「◎」は頭注が有り、付訓僅少なものを示す。「◎」は頭注が有り、全体に付訓有るもの、「◎」は頭注が最も多いものを示す。「柱刻」欄にある「+」は魚尾が無く、柱題が「四書大全」であるもの、「※」は魚尾が無く、柱題が「四書大全」であり、頭注に匡郭の有るもの、「☆」は魚尾が有り、柱題が「龍頭四書大全」であり、頭注に匡郭の有るものを示す。「構成」とは大学章句大全と大学或問とを取り上げて、その内部の序や凡例や目次、本文等の配列と各丁数を調べた。欄の「△▽◇□」はそれぞれ序や凡例の名称が異なったり、丁数が異なるものを示す。「刊記」欄の「慶」は慶長四年刊、「萬」は万治二年刊、「明」は明暦二年刊、「藤」は藤原惺窩輯、刊行年未詳であることを示す。刊記に関しては、注(2)を参照。又、表中、系統の境界を野線にて示す。「―」は不明個所を示す。

分類表と調査結果から以下の六点の事柄が認められる。

- 一、慶安四年(一六五二)刊本と万治二年(一六五九)校本とは刊記以外の箇所は近似している。
- 一、明暦二年(一六五〇)刊本は頭注が存するが、刊行年未詳本(龍

頭評註四書大全」の頭注より、最も訓点も少ない。

(1) 九州大学1、2本は、刊記の存する巻以外は、元禄四年(一六九二)刊行の熊谷立閑加點「鼈頭新增四書大全」である。

(2) 九州大学3本は、「鼈頭評註妙寿院惺高藤敏夫先生籍剛補點石齋鶴信之」の刊記を有するが、その刊記の存する巻以外は、明暦二年刊本である。

(3) 刊行年等を参考に分類すると、慶安四年刊本一万治二年修本の群、明暦二年刊本の群、更に刊行年未詳本の群の三種類に分けられる。

(4) 「四書大全」は主として頭注の多寡により系統間の丁数に違いが生じている。

(5) 鈴木直治「中国語と漢文訓読の原則と漢語の特徴」(光生館 昭和五十年)等。

(6) 用例の所在は、篇・章の順に示す。章の番号は、金谷治「岩波文庫論語」(岩波書店 昭和三十八年)による。論語一篇の章が平均二十から三十程度ある中、甲類と乙類の間で異向の見られる章は一篇あたり平均五から十存している。

(7) 築島裕「平安時代の漢文訓読語につきての研究」(東京大学出版会 昭和三十八年 八〇一頁)

小林芳規「平安鎌倉時代に於ける漢籍訓読の國語史的研究」(東京大学出版会 昭和四十二年) 一一二頁参照。

(8) 「訓点復古」勉誠社文庫三一(勉誠社 昭和五十三年) 中田祝夫解説参照。

(9) 石川洋子「四書」の中の助字「之」の近世における訓読について」(実践国文学) 三九 平成三年三月

(10) 長澤規矩也・阿部隆一編「日本書目大成」三(汲古書院 昭和五十四年) 所収「倭板書籍考」(巻一・八丁六行)

(11) 扱った資料は、「白虎通徳論」が「和刻本漢籍隨筆集」第十集(汲古書院 昭和四十九年)、「杜少陵先生詩分類集註」が「和刻本漢詩集成・唐詩」第三・四輯(汲古書院 昭和五十年)、「事物紀原」が「和刻本類書集成」第二輯(汲古書院 昭和五十一年)、「唐柳河東集」が「和刻本漢詩集成・唐詩」第五・六輯(汲古書院 昭和五十年)、その他は架蔵本を用いた。

(12) 「鼈頭評註四書大全」は刊行年不明であるが、少なくとも、元禄頃までには刊行されていたと考えられる。それは元禄四年(一六九二)刊「鼈頭新增四書大全」(熊谷立閑点)中に、「石齋点」に漢文本文や付訓の字形が酷似している例があり、「石齋点」を覆せ彫りしたことによる誤刻と思われる箇所が存するからである。石齋点と立閑点の両資料の先後については、既に大江文城や宇野田尚哉に触れるところがある。

(13) 注(1)文献、注(1)文献書評(齋藤文俊「國語學」一九八 國語學會 平成十一年九月)

(14) 内野真嶺「論語を中心として觀たる訓點の變遷」(松井簡治博士古稀記念論文集) 昭和六年

(15) 石川洋子「後藤点について」(嘉永新刻論語後藤點片假名附)を中心に「(同期國文) 二五 平成六年三月)

(16) 注(1)文献四〇三頁等参照。又、石齋点「論語」は、その他の石齋点漢籍中に引用という形で見られ、その「論語」の訓読も異向がある。石齋点「白虎通徳論」は、「論語」曰として「論語」の引用である。ことを明示した箇所が五十二例あり、この五十二例と内閣文庫蔵「四書大全」一万治二年修本(甲類)の「論語」の訓読とを比較したところ、「四書大全」にて「不_レ佩_レ」とある箇所が「白虎通徳論」にて「不_レ佩_レ」とある動詞の訓読の異同、「四書大全」が「トキハ十則」と訓む箇所を「白虎通徳論」の論語では「已然形十_ハ十則」と訓む助字の訓読法の異同、そ

の他本文の漢字の異同等が存する。「則」字の訓詁法の異同は、「四書大全」の甲乙兩系統においては現れない。

(18) 近世においては、商業上の理由から著名人の名を借りることも指摘されている（大野出「道春点」老子口義』と徳倉昌堅』「近世文藝」六九 平成十一年一月）等。

〔付記〕 本論の作成にあたり、室山敏昭先生、松本光隆先生に終始懇切なご指導を頂いた。その他にも、広島大学の諸先生には有益なご助言を賜った。深謝申しあげる次第である。又、資料の閲覧をご許可頂いた各図書館にはお礼申し上げる。最後に本論文のきっかけを与えて下さった故種友明先生の「冥福をお祈りするとともに本論文を以て追悼の意を捧げたい。

——ながまつ・ひろあき、本学大学院博士課程後期在学——